

エッセイ

土産の味

浦野裕司

旅好きな私は、土産好きでもある。土産好きな私であるから、土産にまつわる失敗も数知れない。けれども、失敗の数々は土産の味を忘れ難いものに変えてくれるのである。

甘くて酸っぱい「流水飴」

土産にまつわる最初の失敗の思い出は、四十年近く前、大学生時代に遡る。その頃、私は北海道を巡る旅に熱中していた。前年の秋に旅した北海道の大自然に魅入られた私は、大学の授業がなくなった翌年の二月、流水を見るために冬の北海道へ行くことにした。「上野発の夜行列車着いた時には、青森駅は雪の中」と、当時はやっていた演歌の

歌詞そのままの旅の始まりだった。早朝の青森駅で、急行「八甲田」から青函連絡船「摩周丸」に乗り換え、目指すは函館。函館に着くとすぐに列車に乗り替え、札幌へ。という経緯か、札幌市郊外の神社境内に保存されている屯田兵の住居を見学。狸小路で札幌ラーメンを食べて、再び夜行列車に乗り網走に向かう。背もたれが直角で固い座席の、夜行列車の二連泊など、今は考えるだけでぞっとする。けれども学生時代は夜行列車に乗ること自体が旅の目的の一つだったから、それはそれで楽しかった。

二つ目の夜が明けて終点の網走駅まであと二駅ほど、たしか女満別駅あたりではないかと記憶しているが、その駅

で乗車した老婆が向かいの席に座った。「どこから来たさった」の問いに「東京から」と答えようとしたが、口が動かない。なにしろ一人旅だ。二日前に上野を発つてから口にした言葉といえば、札幌狸小路のラーメン店で発した「味噌ラーメン」だけだ。口の筋肉も舌も固まったように動かず、やつとのもので「東京から」と答えると、「こんな寒い季節に、何しに来なさった」と言う。「流水が見たくて」と流水のごとく固まった言葉を吐き出すと、老婆は背筋をピンと伸ばしてから「ご苦労様なことだ」と言い、

に、何か言いたそうな顔をしていたのも気にかかる。もしかしたら老婆は「一粒どうぞ」というつもりで流水飴の袋を差し出したのかもしれない。いや、ふつうに考えればそうだろう。だとしたら…。受け取ったまま返さなかったのは完全に私の早とちりだ。あの流水飴の爽やかな甘さの思い出に、微かな酸味が加わるのである。

「おばあちゃん、ごめんなさい」

淡く儂き「十勝ワイン」

丁寧に頭を下げる。何がご苦労様なのか分からないまま黙っている。「よかつたら舐めなさい」と飴の袋を渡された。透き通った青と雪のような白が混じったシンプルな甘さの飴、その名も「流水飴」。老婆は「お土産に」と袋を手渡してくれたのだと思ひ、一粒口に入れた後、残りをコートポケットに入れた。旅の途中ですべて食べて舐めてしまったので土産にはできなかつたが、あの爽やかな甘さは、今でも現実感を伴って思い出される。

老婆との短いやり取りは、心に残るよい思い出。ただ、思い出すたびに、ちよつとした罪悪感に苛まれる。後で振り返れば、老婆に渡された流水飴の袋は、すでに開封されていたような気がするからだ。それに、網走駅で別れる時

次なる失敗は、翌年の冬の北海道旅行でのこと。当時、北海道の池田町で生産する十勝ワインがちよつとしたブームになっていて、東京でも白と赤の十勝ワインが販売されていた。けれどもロゼは生産量が少ないということで、特別なルートで購入するか現地で直接買うかしかが方法がなく、幻のワインと呼ばれていた。旅の終盤、「そうだ、池田に寄ってワインを買って帰ろう」と思い立ち、ワインを買うためだけに池田町を訪れた。観光名所にもなっていたワイン城という工場兼販売所へ行くと、冬季休業中。仕方なく近くの酒屋へ。「すみません、東京からロゼワインを買いたい来ました。二本ください」と伝えると、「ああ、ロゼなら池田町民限定だよ、白と赤なら売れるけどね」と言う。

「一本だけでも駄目ですか」とお願いしても「ああ、だめだね。赤も白も美味しいからどうだい」と、にべも無い。赤や白なら東京でも買える。「じゃあ、いいです」と、何も買わずに帯広に戻り、当時は帯広でしか買えなかった六花亭のチョコレートを買った。

こんな体験があるからか、ロゼワインを好んで飲みたいとは、終ぞ思ったことが無い。私にとってロゼワインは、赤ワインより淡く、白ワインより儂いのである。もちろんチョコレートは、大の好物である。

しょっぱさと甘さの「モンゴル岩塩」

土産にまつわる最大の失敗については、かつて本誌の「モンゴル紀行」で触れたのだが、改めて概略を。

ウランバートルの市場で買い求めた岩塩のことである。たかが塩と侮ることなかれ。モンゴルの岩塩はミネラル豊富で、しょっぱいだけではない、実に味わいのある塩だ。

モンゴルの旅を終え、成田空港行き便の搭乗開始時刻にあとわずかという時のことだ。構内放送で「ミスター、ウラノユウジ」と呼び出され、預けた荷物の確認をさせられたのは肝を冷やした。強面の検査官が示したX線検査のモニター画像には、スーツケースの底に整然と並んだ百

袋の小袋が、はつきりと映し出されていた。どう見ても「クスリ」だ。スーツケースを開ければその正体が岩塩であることはすぐに証明できるのだが、「説明しろ」と英語で詰め寄られたのには参った。しどろもどろになって説明した挙句、「こんなに土産を買って帰るのか」とゲラゲラ笑われて解放された。

麻薬の運び屋として逮捕されず、無事に帰国でき、またとない土産話となったのは幸いである。しょっぱいけれど、甘味も感じられるのがモンゴル岩塩である。

辛くてチャーミングな「XO醤」

空港と言えども一つ、忘れ難い土産の失敗がある。四年前に台湾旅行をした折のことだ。中華料理最高峰の調味料、XO醤。質の高いものが手に入るので、土産用に行くつか買い求めた。液体物は機内持ち込み禁止ということなど分かっていたにもかかわらず、「高価な土産」という意識がそのことをすっかり忘れさせた。割れてはいへんと、浅はかにも手荷物に入れてしまったのだ。当然の成り行きとして手荷物検査で没収となるところだったが、観光客に親切な台北空港の検査官は「梱包して搭乗受付カウンターに戻って預け直してきなさい」と言う。しかし、

その後がいけなかった。ほっとして気が緩んだ私は、手荷物をすべて妻に預けたまま、検査場を後に喜び勇んで搭乗受付カウンターまで戻ってしまったのだ。

さて、それからがたいへん。搭乗受付カウンターへ行くのと「向こうにある宅配業者のカウンターに行って、梱包を頼んできなさい」と言う。XO醤のビンをビニール袋に入れただけでは、預け荷物として受け付けてくれるはずがない。それはそうだと今度は宅配カウンターへ。「クロネコヤマトの宅急便」の幟に安心しきって「これ、梱包してください」と、笑顔のかわいい受付嬢に手渡した。「ああ、これで無事にXO醤をお土産にできる」と安堵した私は、きつと嬉しそうな笑顔でいっぱいだったことだろう。

ところが、である。一転、私の嬉しそうな笑顔は「二十香港ドルです」の言葉に萎んでしまうことになる。二十香港ドルは日本円にして三百円にもならない。「ああ、そんなものか」とウエストポーチの財布を取り出そうとしたとたん、とんでもないことに気付いた。ウエストポーチが無いのである。財布もパスポートも携帯電話も、すべてウエストポーチの中。それを、すでに出国審査を終えているであろう妻に預けてしまったのだ。あるのは、胸ポケットに入れた搭乗券のみ。受付嬢に事情を話すと、困ったような

それでいてとてもチャーミングな笑顔で首をかしげている。その笑顔に見とれていてもどうにもなるわけもなく、ここは諦めるしかない。「XO醤は、貴方にあげます」と伝えて、その場を立ち去ろうとした。すると彼女は、「OK、無料で梱包してあげます」と、奇跡のような言葉を口にしてくれた。信じられない気持ちで梱包してもらい、チャーミングな笑顔で手を振る受付嬢の方を振り返り返り、再び登場カウンターへ。搭乗券を見せて梱包してもらった土産を手渡すと、いとも簡単に受け付けてくれた。

ほっとする間も無く急いで横のエスカレーターを上り、保安検査場へ向かうと、またしても難関が。そう、パスポートを持っていないから、それ以上先へ進めないのである。途方に暮れるとは、このことだ。力が抜けてしまい、ぼんやりと遠くの保安検査場の方を見ていた。そこでまたしても、奇跡が起きた。検査官が遠くから手招きしている。どうやら検査場内で私たちの旅のリーダーが話してくれたらしい。検査場脇の係員専用の出入り口から中へ入ることができた。

帰国後、土産のXO醤を使ってチャーハンを作った。辛みだけでなくチャーミングともいうべき、温かく深みのある味のように感じた。

